

# 第 章

## 教育の実施体制

## 第 章 教育の実施体制

### 1. 教員組織の整備

#### 1-1. 短期大学部専攻科の教員数

##### [現状の報告]

図表 9 及び 10 に示すように、短大専攻科の全授業の担当教員の数を見ると殆どの授業において専任教員が配置されている。短大専攻科においては特に専門的な授業が多いので特定の専任教員だけでは賄えない授業もある。そのような専門科目では非常勤教員を配置している。

下記の表において

- 1: レッソンのみの担当教員は表中にて で囲まれた数字で示すが、短大専攻科の授業担当教員数（図表 11、12）には含めない。
- 2: 同一教員による短大専攻科の専攻横断の同一科目は、専任教員数では 1 カウントとし、1 科目のみ（ ）無数字で示す。表中で同一科目名で（ ）で囲まれた数字は同一教員を示す。
- 3: 異なる科目は担当教員が同一であっても各々一回ずつカウントする。

図表 9 短大専攻科の専任教員表（共通科目）

(2004 年度 4 月時点)

授業科目名	専任教員数(人)				助手 (人)
	教授	助教授	講師	計	
コンサート・プロデュース	1			1	
ポピュラー音楽概論		1		1	
鍵盤楽器特修					
音楽史特論	3			3	
音楽史特論	(3)			(3)	
コンピューター音楽演習 -					
- (初級)	1			1	
- (中級)	(1)			(1)	
吹奏楽指導法		1		1	
AV機器概論	1			1	
音楽社会活動実習					
音楽療法(応用)	1			1	
音楽療法(実践)	1			1	
外国語S (英会話)				0	
外国語 S	英語			0	
	イタリア語		1	1	
	ドイツ語				
	フランス語			0	
合計	8	3		11	

図表 10 短大専攻科の専任教員表（専門科目）

## 作曲専攻

(2004 年度 4 月時点)

授業科目名	専任教員数(人)				助手 (人)
	教授	助教授	講師	計	
作曲					
作曲理論S					
作品分析	1			1	
対位法作品研究	1			1	
デスクトップ・ミュージック 編曲法	1			1	
合計	3			3	

## 声楽専攻

(2004 年度 4 月時点)

授業科目名	専任教員数(人)				助手 (人)
	教授	助教授	講師	計	
< 声楽 >					
声楽A (歌唱)					
声楽B (発声)					
ドイツリート演習	1			1	1
日本歌曲演習	1			1	1
声楽資料研究				0	
声楽アンサンブル				0	1
舞台制作実習				0	
< ミュージカル >					
声楽A (ボーカル)				0	
声楽B (アクティング)				0	
演出演習				0	
ダンス演習				0	
舞台制作実習				0	
< ポピュラー・ボーカル >					
声楽A (ボーカル)					2
声楽B (アクティング)				0	
ポピュラー音楽研究S		1		1	
ダンス演習				0	
舞台制作実習		1		1	
合計	2	2		4	5

## 器楽専攻

(2004年度4月時点)

授業科目名	専任教員数(人)				助手 (人)
	教授	助教授	講師	計	
<ピアノ・クラシック> 器楽A					
ピアノアンサンブル - - A(連弾)	1			1	
- B(二台)		1		1	
ピアノ初歩教材研究	1			1	
ピアノ作品構造研究				0	
<ピアノ・ポピュラー> 器楽A				0	
器楽B				0	
器楽アンサンブル				0	
ポピュラー音楽研究S		(1)		(1)	
ポピュラー音楽概論		(1)		(1)	
<電子オルガン> 器楽A					
器楽アンサンブルS		1		1	
ポピュラー音楽研究S		(1)		(1)	
器楽編曲法S		1		1	
器楽指導実習		1		1	
<管楽器・打楽器> 器楽A(応用)				0	
器楽B(基礎)				0	
吹奏楽SA				0	
吹奏楽SB				0	
合奏(A)S	1			1	1
オーケストラ	(1)			(1)	
マーチング指導法		1		1	
管打楽器リペア実習	1			1	
<弦楽器> 器楽A(応用)				0	
器楽B(基礎)				0	
オーケストラ	1			1	
室内楽研究	1			1	
弦楽作品構造研究				0	
<ジャズ> 器楽A(応用)				0	
器楽B(基礎)				0	
ポピュラー音楽概論		(1)		(1)	
管打楽器リペア実習	(1)			(1)	
ジャズアンサンブル				0	
<箏> 器楽A(箏)				0	
器楽B(三絃)				0	
箏歌				0	
箏合奏				0	
合計	6	5		11	1

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

上記の表のように短大専攻科の授業科目、レッスン科目の殆どの担当教員が、教授、助教授の専任教員で占められている。これは専攻科の組織が確実なもので信頼性の高いものと評価でき、教育活動に過不足ない教員数が充足されている。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

教育体制は整えられているが、学生減によって待機状態になる専攻、科目がないように学生数を確保したい。

**1 - 2 . 教員に相応しい資格と資質**

**[現状の報告][自己点検・評価及び長所と問題点][将来の改善・改革に向けた方策]**

教員に求められる資格と資質は、演奏・研究業績は勿論のこと、その業績を背景とした教育力にあると考えている。いずれも密接な関係にあり、程度の差はあるもののバランスを維持するよう各教員の努力が必要となってくる。

**1 - 3 . 教員の採用、昇任（選考基準等の整備）**

**[現状の報告]**

2005年3月17日に制定された大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部専任教員採用選考基準ならびに同昇格基準に従い2005年度以降はこれに則り行われる。2005年度までは各専攻部会がその選考の重要な役割を果たしていた。即ち、新たに制定された採用基準、昇格基準は各部会の意見、基準を参考にまとめられたものである。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

教員の質がこれからの大学の運命を左右するとも考えられる。2005年3月17日に制定された各規準は、いずれもこれからの大学及び短大に相応しい教員を選べる内容である。

教員の選抜には、技術的に優れているだけでなく如何に良い音楽を教えられるかと言うことと、個人レッスンが指導の主を占めるので人間的な面も重要な要素となる。しかしながら、短時間に教育能力、研究・演奏能力、人間性のすべてを把握することは難しいといえる。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

2005年3月17日に制定されたところなのでしばらく様子を見なければならない。

**1 - 4 . 教員の年齢構成のバランス**

**[現状の報告]**

短大専攻科の専任教員の年齢構成を図表11に示す。

図表 11 専任教員の年齢構成表（講師以上）

(2004年度4月時点)

年齢	30～39	40～49	50～59	60～68	平均年齢（歳）
教員数（人）	1	4	6	8	55.15

・この表において前述の短大専攻科授業担当表の総専任教員数（29人）と人数が合致しないのは1人の教員が2～3科目担当している場合があるからである。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

短大専攻科は特に専門科目を重視するため、その指導は教授及び助教授の担当が多くなる。教授、助教授の年齢はどうしても高くなっていくので平均年齢 55.15 歳（2004年度4月時点）となる。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

将来に向けて年齢層のばらつきがないように、できるだけ教員の担当割り当てには配慮するように考えていかねばならない。しかしながら、専門科目を重視することから、ある程度の偏りは必然的に生じるのもまた短大専攻科の特徴である。

### 1-5. 教員の業務に対する意欲

#### [現状の報告]

##### a. 担当授業に対する意欲

短大専攻科にて授業を担当している各教員の付属教育機関（大学、大学専攻科、短期大学、短大専攻科）での担当授業総数（2004年度）と、短大専攻科における担当授業数（コマ数）を図表 12 に示す。

図表 12 各教員の担当授業数（コマ数）（2004 年度）

教員	担当授業総数（コマ数）	専攻科における担当授業数（コマ数）
A	12	3
B	10	1
C	11	1
D	6	1
E	7	1
F	7.17	2
G	6.6	1
H	14.5	2
I	14.67	1
J	5.13	1
K	9	1
L	8.25	3
M	7	2
N	4	3
O	3	1
P	11.25	1
Q	15.17	3
R	7	1
S	8	1

- ・ 担当授業総数において小数点以下が出来るのは、音楽専攻の学生を担当している教員が合同授業を担当している為である。
- ・ 短大専攻科においてレッスンのみを担当している教員は表中に含まれない。

本学では担当コマ数の責任基準量として、実技教員では週7コマ、講義科目系教員では週6コマの担当となっている。短大専攻科における教員の平均担当コマ数は1.6(2004年度)コマであるが、併設の教育機関と兼任している為に担当授業総数では平均8.8コマ(2004年度)となる。

#### b. 教員による研究活動、研究業績

##### - 教員の研究活動 -

- ・ 毎年年度末に実技、学科教員は研究業績、演奏活動の実績を提出するようになっている。その年度における各教員の活動状況はそれにより把握できる。
- ・ 公開講座での研究発表、研究紀要への執筆、学内での演奏会（例：ピアノ教員のミレニアムコンサート）など研究活動の場は学内外多々あり、各々の教員は個人の意志でそれらの活動に積極的に参加している。
- ・ 教員には研究助成制度があり毎年何人かの教員がそれらの制度を利用している。2003年度19件20名、2004年度は31件29名（いずれの年度の数字も併設機関も含めた数字である）が認定を受けている。

##### - 研究助成制度 -

以下に研究助成制度の種類を示す。

- ・ 研究紀要論文執筆補助費認定
- ・ 通常研究認定
- ・ 特別研究認定（学術分野、芸術分野）

- ・ 海外研修（短期特別研修、短期補助研修、短期私費研修）

### c. 教員が参画する学生指導の業務、研究上の業務

#### - 学生指導の業務 -

毎年4月、授業が開始される前に（2004年度は4月9～10日、2005年度4月9～10日予定）フレッシュマンキャンプ（付属機関と合同イベント）がYMCA六甲研修センターで行われている。これは新入生（主に寮生）と在校生の交流を深めたり、新入生の不安を少しでも和らげるための行事として行われている。これには学長、副学長、学生部長、その他の関係する教員が参加し、オリエンテーションを含めた企画を織り込んでいる。また、4月の各専攻別のガイダンス時には学務センターの職員と各専攻から教員（その専攻の教務担当者）が参加してその専攻の詳細（履修内容、選択方法）を説明することになっている。

短大専攻科においては、7月に行われる次年度の入学希望者ガイダンスでも教員（主事）が参加してその内容、本専攻科についての魅力を話すことになっている。

#### - 研究上の業務 -

短大専攻科において教員が参画する学生主体の演奏会があるが、これは年によって学生の意欲が大きく異なるので開催されない年もある。

2003、2004年度は積極的な学生が多く、自主演奏会が学外、学内で開催された（2003年7月13日：豊中市役所ロビー、2005年3月14・15日：大阪音楽大学ミレニアムホール）。その際、教員は進行のアドバイスやホール確保のための援助を行い、また演奏会を聴講して学生へのアドバイスを含めた援助を行った。

### [自己点検・評価及び長所と問題点]

上記のように各教員（A～S）がそれぞれの持ちコマの1～2割に当たる割合で短大専攻科の授業を担当している。殆どの教員が実技教員であるので、担当の個人レッスンも行いながら研究業績、学生指導、教育研究上の業務をこなしている。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

今の体制で特に問題はないと思われる。

## 1-6. 助手、補助職員等の確保状況と教育活動等への機能

### [現状の報告]

短大専攻科では2004年度は6人の教育助手に4つの授業、2つのレッスン、2005年度は2人の教育助手が2つの授業について教員の補佐を行った。これは授業を円滑に進めるために必要である為である。特にアンサンブルが多い専攻では必ず必要な人材であると言える。しかしこの制度（教育助手の採用、運用制度）は2008年度より廃止され

ることになっており、新しい制度が実施される。新しい制度では演奏員制度（卒業生の中からオーディションにより専攻実技の能力の優れた人材を選び、授業や学外からの演奏依頼を引き受けてもらう制度）を利用して教育助手に代わり授業の補佐を行う。

短大専攻科の教育補助担当員は専攻科のガイダンス、学生の時間割、試験の時間割、授業がスムーズに進められるように配慮している。

### [自己点検・評価及び長所と問題点]

短大専攻科の授業は専門的な要素が多いので、その要素を発展させるためには助手の協力が欠かせない授業がある。特にアンサンブルの多い専攻ではその必要性は高い。そのためにも新しい制度が授業の進行に役立つ制度でなければならない。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

演奏員を利用した新しい制度がどのように機能するか様子を見てみたいが、能力のあるものが採用されることになるため、うまく機能すると思われる。

## 2. 教育環境の整備・活用状況

### 2-1. 校地面積、教育環境としての整備状況

#### [現状の報告]

校地面積を図表 13 に示す。

図表 13 校地面積

校地届出面積 <1999年 1月13日届出>		67,828.00m <sup>2</sup>		
名称	所在地	面積 (m <sup>2</sup> )	備考	
自 有 地	庄内校地	〒561-8555 豊中市庄内幸町1-1-8	9,943.59	短大、大学、大学専攻科、大学院と共有
	西町校地	〒561-0832 豊中市庄内西町1-16-1、16-3 (ザ・カレッジ・オペラハウス)	4,183.53	同上
		〒561-0832 豊中市庄内西町1-24-2、25、 33、34-1		
	野田校地	〒561-0855 豊中市野田町36-1	9,015.19	同上
	名神口校地	〒561-0841 豊中市名神口1-4-1	7,171.00	同上
	豊南校地	〒561-0814 豊中市豊南町東1-5-1	4,509.47	同上
	箕面校地	〒563-0252 箕面市下止々呂美520-1	32,854.00	同上
計		67,676.78m <sup>2</sup>		
借 地	西町借地	豊中市庄内西町1-23-2(チケットOCM)	151.22	同上
	計		151.22m <sup>2</sup>	

校舎届出面積 <2001年 1月16日届出> 46,752.08m<sup>2</sup>

\*校舎面積は幼稚園舎を除いた建物面積。

### [自己点検・評価及び長所と問題点]

本学は6カ所に校地が分散しているが、各校地は本校（庄内校地）を中心にして徒歩圏内である。本校へは大阪の中心地（梅田）から阪急宝塚線で10分、徒歩約10分の約20分程度で来れる便利さである。名神口校地へは本校からスクールバスの便も確保されている。また、それぞれの校地は安全性の面から警備員の配置、防護柵が設置されており安全面にも対処している。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

都心近郊の学校であるため、これ以上の拡大、拡張は困難であるが、教育研究活動には現時点で支障が無く、現状でよいと考えられる。

## 2-2. 校舎の面積と環境整備状況

### [現状の報告]

図表14に各館の延べ面積、図表15にレッスン室、講義室、演習室、練習室の数を示す。

これらはいずれも、併設教育機関と共通利用されている。

図表14 校舎面積の内訳（延べ面積）

庄内校地	A号館	3,679.88 m <sup>2</sup>
	C号館	1,903.24 m <sup>2</sup>
	E号館	590.10 m <sup>2</sup>
	G号館	247.83 m <sup>2</sup>
	J号館（学生サロン）	1,378.63 m <sup>2</sup>
	B号館	2,244.75 m <sup>2</sup>
	D号館	1,606.84 m <sup>2</sup>
	F号館	3,909.15 m <sup>2</sup>
	H号館	1,439.05 m <sup>2</sup>
	守衛室	11.42 m <sup>2</sup>
西町校地	L号館（オペラハウス）	5,489.39 m <sup>2</sup>
	N号館（アドミッション・センター）	287.97 m <sup>2</sup>
	M号館（チケットOCM）	72.87 m <sup>2</sup>
野田校地	O号館	3,375.15 m <sup>2</sup>
	O2号館	186.14 m <sup>2</sup>
	P号館（含ミレニアムホール）	2,582.17 m <sup>2</sup>
名神口校地	K号館	14,310.41 m <sup>2</sup>

・以上のようにそれぞれの校地に校舎が配置されておりそれぞれの校舎へは徒歩で行き来できる範囲にある。

箕面校地	箕面校舎	492.98 m <sup>2</sup>
豊南校地	豊南寮	2,944.11 m <sup>2</sup>
校舎面積合計		46752.08 m <sup>2</sup>

（管理関係、図書館、厚生施設、付属研究施設を含む）

図表 15 各館の教室数の内訳（部屋数）

	レッスン室	研究室	講義室	演習室	練習室	実習室
A号館	21		6			
B号館	27		9	1		
C号館	15		4	2		1
D号館	14		4	1		
E号館					8	
F号館	35		10	6 (内ML1)	58	
G号館					10	
H号館		42				
O号館	10	2		6	30	
P号館		1		5		
K号館		3	4	28 (内ML2)	29	1
合計	122	48	37	49	135	2

・ ML=Music Laboratory の略

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

本学の校舎の総面積は 46,752.08m<sup>2</sup> になる。都心型大学のためこれ以上の拡張拡大は難しい。しかし地の利を生かしたところに本学が位置しており、学生には通学しよいと言える。

本学は音楽を専門としている関係上、騒音の問題が付きまとうが各校舎は防音処置がされ、全室防音、冷暖房完備である。また楽器特有の利用便を配慮し、声楽、ピアノと管楽器を館によって分けることもしている。校舎は毎年、主に夏季休暇の間に内装、外装工事をしてリニューアルしている。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

レッスン室の広さが様々でかなりの差がある。また、設備機器（ピアノ、ステレオ、楽譜）においても同様である。教員の教室配置には、今後さらなる配慮が必要だといえる。

### 2-3. 教室の整備状況

#### [現状の報告]

図表 15 において各館のそれぞれの数を提示した。講義室、演習室、実習室には音楽関連の授業に必要なコンサート用グランドピアノ、グランドピアノ、電子ピアノ、電子オルガン、ステレオアンプ、レコードプレイヤー、カセットテープデッキ、TV、CD、LD、DVD、VTR のプレイヤーが必要に応じて揃えられている。本学では主要科目である実技レッスンのためにレッスン室、研究室が圧倒的に多い。また、レッスン準備のための練習室も十分用意されており、学生には無料で貸している。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

以前には練習室不足による学生からの増設も望まれていたが、2000年にP号館に新しく練習室が設置され改善されている。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

施設の面においては特に問題はないと思われる。

**2-4. 情報機器を設置するパソコン教室、マルチメディア教室、LL教室、学生自習室等の整備状況**

**[現状の報告]**

学生達が最近の情報機器に対応できるようにパソコン室が設置されている。就職、教養として役立つように、授業にも取り入れられて使用されている。「ぱうぜ」(食堂兼学生控え室)のパソコンは学生が自由に利用でき、使用頻度も高い状況である。パソコン設置場所と台数は、F号館212号室20台、213号室36台、K号館118号室24台、504号室20台、「ぱうぜ」9台となっている。

学生自習室は特別に設けられていないが、「ぱうぜ」2階がその役割を果たしている。座席数が約650席あり、1階の食堂とともに学生達の自習の場であり休息の場となっている。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

毎年コンピューター演習の授業を選択する学生は増加傾向にあるが、現状で対応できると思われる。また、毎年3月、9月に集中講座としてパソコンの資格取得準備講座がそれぞれ7日間、11日間開かれている。卒業後の資格、技術、教養として活かせる様に今後も選択希望者が増えると思われる。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

パソコン(OSを含む)の機能が日々進歩し変化していく中で、学生達が新しい情報機器に対応できるように何年かに一度の入れ替えが必要であろう。

**2-5. 授業用の機器・備品についての整備システムの確立と整備状況**

**[現状の報告]**

本学(併設教育機関を含む)には図表16の授業用の機器・備品が備えられている。

図表 16 授業用の機器・備品数（2004 年度 4 月時点）

種類	個数	備考
鍵盤楽器	948点	フルコンサートグランドピアノ11台、グランドピアノ460台、アップライトピアノ67台、電子オルガン、電子ピアノを含む
管弦打楽器	559点	
合奏用楽器	1314点	
教具備品	1532点	ステレオ装置，LD・CD・DVDプレイヤー，TV、カセットデッキを含む

図表 16 の機器、備品が講義室、演習室、実習室、研究室、練習室、講堂で開講される授業、講義用に備えられている。これら機器・備品は付属機関と共同利用されている。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

授業用の機器、備品の数においては特に不足しているということはない。これら機器、備品の管理は管理事務部門が担当しており、鍵盤楽器に関しては年に4回調律を定期的に行っている。また、断線、調整不良等を含めて、使用の都度問題があれば即対応している。その他の楽器に関しても使用の都度、問題があれば即対応している。特に授業用の教具、備品は授業前に毎日点検を行っている。また、鍵盤楽器、特にピアノは消耗品であるので何年かごとの入れ替えが必要となっている。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

数的な問題、整備のシステムに関しては特に問題はないが、学生達の公共物の扱いに対する意識を促して機器、備品を大切に扱うよう指導していかなければならないと考えている。

## 2 - 6 . 校地と校舎の安全性

#### [現状の報告]

本校の校地である庄内校地は全体を安全柵で囲み不審者の侵入を防いでいる。校門には警備員を常駐させて外来者のチェックを行っている。校地の反対側にある出入り口は、外部からは関係者以外入れない構造になっている。他の校地も各出入り口に職員を置いて外来者のチェックをするようになっており、安全性には配慮している。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

最近、教育機関の安全性が見直されている。学生の安全を考えると、今のシステムでも万全とは言えないが一応の成果は見る事ができる。今後さらに安全性を高めるための対策を考える必要があると思われる。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

出来る限り警備員の増員、職員の常駐、監視カメラの増設を考えねばならない。身体障害をもつ学生に対する施設、設備の整備については、さらに拡大することが必要である。

**2 - 7 . 運動場及び体育館**

**[現状の報告]**

当校の屋外運動場として第1キャンパスに約4,0632m<sup>2</sup>、屋内体育施設として名神口校地のK号館に1,615.03m<sup>2</sup>の広さを持つ施設がある(一部はテニスコートに整備されている)。野外運動場は一部中庭と駐車場を兼ねている。野田校地へは徒歩1分、名神口校地へは徒歩7分程度の距離である。また、スクールバスの便も運行されている。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

屋外運動場は2000年にP号館が建設され、その際に一部が駐車場として整備された。その為、屋外運動場としての機能は従来よりも低くなったと言える。都会型の教育機関としてはいたしかたないと言える。K号館の屋内体育施設は併設の大学、短大の体育の授業で頻繁に使用されている。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

学生達が自ら厚生施設を利用し、できるだけ野外へ出て健康維持を考えるように指導していきたい。

**2 - 8 . 図書館**

**[現状の報告]**

付属図書館はC号館(1階)、D号館(1階)に位置し、C号館は図書の閲覧室として利用され、D号館は主に視聴覚資料の試聴のために利用されている。

**[自己点検・評価及び長所と問題点][将来の改善・改革に向けた方策]**

付属図書館は併設教育機関(短大、大学、大学専攻科、大学院)と共通である為、短大専攻科の学生達にとってより高度な図書・視聴覚資料等を利用可能であるといえる。また併設の短大から進学してきた学生達にとっては、利用方法等に慣れているため使いかたがよいようである。専攻科に限って見ると現在の状況で問題がないといえる。

**特記事項**

・図書館以外の学習資源センター(ザ・カレッジ・オペラハウス、音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」、音楽博物館、録音スタジオ、ジャズ・ポップラースタジオ)

本学には音楽教育・研究の場としてザ・カレッジ・オペラハウス、音楽ホール型大教室

「ミレニアムホール」、音楽博物館、録音スタジオ、ジャズ・ポップススタジオが備わっている。これら学習資源センターの設備等の詳細については、併設の短大における自己点検・評価報告書にて説明されているため、ここでは短大専攻科におけるザ・カレッジ・オペラハウス、音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」、音楽博物館での教育・研究に関する活用、効果及び改善が必要と思われる点について簡潔に報告する（録音スタジオ、ジャズ・ポップススタジオについては省略）。

- ザ・カレッジ・オペラハウス -

短大専攻科の学生は修了研究の最後の演奏を本オペラハウスで行なっている。このオペラハウスによる演奏は、2003年度より学生達の希望により実現したことで、学生達にとっては本格的な音楽ホールで演奏できる貴重な体験になっている。この事が示すように、オペラハウスにおける発表は学生達にとって極めて重要な目標設定になっており、学習意欲の向上に繋がっている。また、ジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート、ジュニア・カレッジ・アンサンブル・コンサートの各オーディションで選抜された学生もここで演奏できる（章-4参照）。自身の演奏の場としてではなく、オペラハウスにて開催される付属教育機関の学生達の演奏会、学内の教員による演奏会、招聘した学外の演奏家の演奏会、更に、学内外の教員、著名人の特別講義、公開講座にもその殆どのものを聴講できる。

短大専攻科関係の教員においても特別講義、研究発表、公開講座の場として大いに役立っている。

- 音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」 -

ミレニアムホールは付属教育機関の授業に、また、学生達の自主公演、他の音楽分野に所属する学生達の発表会、特別講義、公開講座にと殆ど毎日のように稼働している。

短大専攻科の学生はコンサート・プロデュースという授業で演奏と演奏会をするための全てをこのホールを使用しながら学ぶことになっている。即ち、照明、楽器の配置、アナウンスを自分達の手で確かめながら進めていく授業である。この授業で学んだことを基に学生達の自主公演が開かれた年度もあった。このホールもオペラハウスと同様に演奏会、特別講義、公開講座が開かれ短大専攻科の学生達も大いに参加している。

- 音楽博物館 -

音楽博物館は学生達が授業で、また授業の空いた時間に自由に見学できるように開放されている（土、日祭日、夏季休暇は休館）。短大専攻科の学生も時間の許す限り見学できる。本専攻科に所属している学生達に限った入館者数は把握できていないが、積極的に見学していることと思われる。音楽博物館には、極めて貴重な楽器類も多く展示されており、それら楽器を身近に感じる機会が在学中に得られるため、学生達にとっては貴重な機会となると考えられる。またそのような機会があることで、学修意欲の向上、

音楽に対する多様な興味を芽生えさせる機会にもなるであろう。短大専攻科に係わる教員においても同じ傾向のようである。

